ソビエト滞在記

佐藤　光之助

ローマで行なわれた国連新エネルギー会議の後　イタリア旅行を終え　チェコスロバキアのプラハから　ソ連製ジェット機に乗り一路モスコーに向かった　昭和36年9月　約半月のソ連滞在はロシア語の通じない私にとっては　いちまつの不安はあったが　ひとり旅の気安さ　ソ連の地質・物探関係の人々の親切で　思い出多い旅となった

ホテル

私は地質省のお客ということで　モスコーのウクライナホテルに宿泊した．　このホテルは1957年に建てられたものでおよそ30階もあり　ヨーロッパで一番の高層建築のホテルといわれている．　ここは外国人向けに作られたものらしく　ロビーは各国人種の展覧会といった感じがする．　カストロひげの軍人　日本人と見まちがう顔つきをした中共の人　その中にまじって日本人の顔もちょいちょい見受けられる．　ホテルにはサービス・ビューローがあって　各種の手続き　金の交換　観光の世話をしてくれるが　仕事ぶりはいささかのろく　感じはお役所の窓口的なものである．　部屋付きの女中さんはぜんぜん外国語が通じないのに閉口した．　年配のおばさんが相当働いているのが目についたが　彼女たちはなかなか親切で気持ちよくすごすことができた．　ソ連ではホテルの食事をもってくるのにも大変時間がかかるといわれていたが　食堂の女給さんと顔なじみになるにつれてサービスはだんだんとよくなり　食事も早く持ってくるようになってきた．　だが　この国にきて短気は禁物で　すべからく長期戦で行かねばならぬと感じた．

今回の世界一周旅行で泊まったホテルのうち　このホテルの部屋代が一番安かった．　簡素ではあるがバス付きの気持ちよい部屋で　1日1200円だけである．　食事はあまり安くなかったが　たらふくおいしいロシア料理を味わいえたので　ソ連滞在の印象はけっして悪くなかった．　これは私が地質省のお客として行ったからであって　もし一般旅行者としてこのホテルに泊まろうとすれば　ソ連旅行公社の旅行のデラックス・クーポンを買わなければならない．　これは食事付きで　1日35ドル取られるのである．　ソ連には日本からの視察団が相当きているが　中には安いクーポンを買ったため　モスコーの場末のひどいホテルに泊まらされこぼしている人を見かけた．　一般にソ連旅行をするには　相当費用がかかることを覚悟しなければならない．

モスコーの街

ホテルに着くと　まずその街の地図をさがし　ガイドブックを求めることは普通である．　モスコーではただ1種類の英文ガイドブックを見つけ手に入れたが　役に立つような街の地図は滞在中には見つからなかった．もっとも街中の本屋をさがし歩いたらあったかも知れないが　そんな暇もなく　街の表通りを一とおり見た程度の見物に終わってしまった．

ガイドブックは180頁もあるりっぱなもので　まずクレムリン　赤の広場からはじまって　モスコーの街の名所旧跡のくわしい説明が大部分であり　それに加えてモスコー自慢の Metro の発達史が詳細に書かれている．駅の飾り付けの自慢もたくさん書かれており　確かにりっぱなものであるが　地下鉄を利用する面からいうと路線の簡単な図もないありさまで　ぶらりと旅行している私にとっては　Metro も単に博物館と同じような役にしか立たなかったのである．　この本の中で街の交通に関して私に役に立ったのは「車および歩行者は　右側通行を守ること　赤は止まれ　黄は注意　緑は進め」　の数行にわたる部分であった．　モスコー市内には市街電車　バス　地下鉄等がよく発達しているが　タクシーは街の中ではなかなか拾えないのが実情である．　ロシア料理　ウオッカ　コニヤック等の酒は前々から聞きおよんでいたものであるが　このガイドブックにはモスコーのレストランの案内は半頁だけ　教会の案内の方がずっと詳しく書いてあったのにはいささか奇異に感ぜられた．

各職場における女性の進出は目につくものである．普通の家庭では夫婦共かせぎである．　これは共かせぎによって家庭の経済が維持されるような賃金水準となっているからである．　しかし託児所等が完備しているので　日本における共かせぎのような苦労は少ないようであり　また女性が相当責任ある地位を占めていることも特色であろう．　物資は自由に買えるが　食料店などでは買物のために行列を作っているのが相当見受けられた．とくに男性が買物かごをぶらさげて列をなしているのはこの国らしいほほえましい風景である．

オペラ　バレー　各種の博物館　古跡等が観光のルートであり　また書籍　音楽のレコードはたいへん安くおびただしい量が出版されているのが特長であろう．これらのうちで　異色あるものとしては　ソ連国民経済向上博覧会をあげることができる．　これはモスコー市の北部の広い敷地の内に設けられており　国民経済に関係したあらゆる分野の　もっとも新しい展示が行なわれ

ている．　人工衛星　私が乗ったジェット機ＴＵ-104Ａはもちろん　地質　物理探査関係も大きな建物にりっぱに展示されている．　とくに物理探査については　あらゆる種類の器械が展示されており　この国の力の入れ方がうかがわれる．

わずかの滞在期間にうけた印象は　古いもの　新しいものの錯そうにおいて　きわめて堅実な　いわば修身的なふんいきが感じられた．　その後訪れたスウェーデンののびのびとした感じ　西独における底抜け騒ぎのようなものには　最後までお目にかかる機会がなかった．

モスコーは世界の大都市と同じように　住宅事情はよくない．　現在盛んに街の中の古い建物をこわし新しく建て直すとともに　郊外では新しいアパートを新築している．　都市計画についてはわが国のような「立退き反対」の運動はないし　日本と違い地盤がよく　地震も少ないので建築はたいへん簡単に進むようである．　街の中ではところどころ道路の掘り返しなどが見受けられた．ソ連の住宅の家賃は俸給の４％程度で　現在のところ３人で１部屋の割り当てで　相当窮屈のようであるが　15年計画で各人１部屋あて持てるような計画が進められているそうである．　建物の不足は住宅だけではなく　官庁　研究所などにも見受けられる．　最近大きくなったような機関では相当苦労している模様である．　私が訪れた全ソ物理探査研究所では　庁舎はいくつかに分散しており　廊下にまで机を並べているところもあった．ちょうど日本の終戦後のように　古い教会を板で区切って実験室に使っているところも拝見した．　このような現状であるけれども　モスコーの人々は建物に対して将来の希望をおおいに持っているように感じられた．　りっぱな道路　堂々たる建物　これらが計画的に順々に建設されている状態を見れば　現在の不便に対してあまり不平はないようである．　収拾のつかない東京の都市計画とは雲泥の差である．　現在までに完成されたもののうちでモスコー大学の建物は　もっとも偉彩をはなっているものの１つである．

モスコー大学

モスコー大学の新しい建物は　モスコーの南西部にあるレーニン丘にそそりたっており　市内でもっとも高いところにある．　この建物は理科系で占めており　その中に地質も含まれている．　地球物理は物理に属するものと　地質に属するものとがあって　後者は主として探査　地殻関係の研究を行なっている．　文科系は市の中心にある旧校舎にいるが　いわゆる工学部的のものはない．　理学部系統を中心としたモスコー大学の新校舎はソ連の教育の重点を示しているものであろう．　ここには完備された寄宿舎があり　学生は全部収容されている．

図書館　博物館　室内体育館　食堂等は自慢するだけあってりっぱなものであるが　数学の講義中の教室に入ってまで説明してくれたのには恐縮した．　モスコー大学に接して　レーニン・スタジアムがあり　各種の競技施設が完備し　いつでもオリンピックができる態勢ができているそうである．

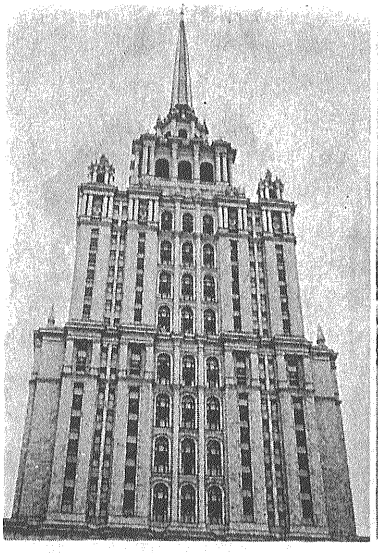
地質調査事業

ソ連はわが国の60倍　地球の陸地の６分の１を占める広大な面積を有し　この広い国土に大小100以上の民族をもって　15の共和国からなる連邦国家をつくっている．この国においては　国土の利用　地下資源の開発はきわめて重要な問題であり　地質調査には大いに力を入れている．

ロマノフ王朝時代の1882年に Geological Committee が設けられ　この時から地質調査が発展していったのである．　これはわが国の地質調査所の設立と同じころにあたる．　現在ソ連においては地質省が設けられ　これに地質調査所　物理探査研究所　石油地質研究所などがあり　また各地区に地質調査所　物理探査トラストが設けられ　盛んに調査研究が行なわれている．　現在10万人以上の人々が　これらの調査研究に従事しているといわれている．　私はソ連滞在中　レニングラードの全ソ地質調査所　西部物理探査トラスト　モスコーの全ソ物理探査研究所　石油地質研究所などの機関を見ることができた．

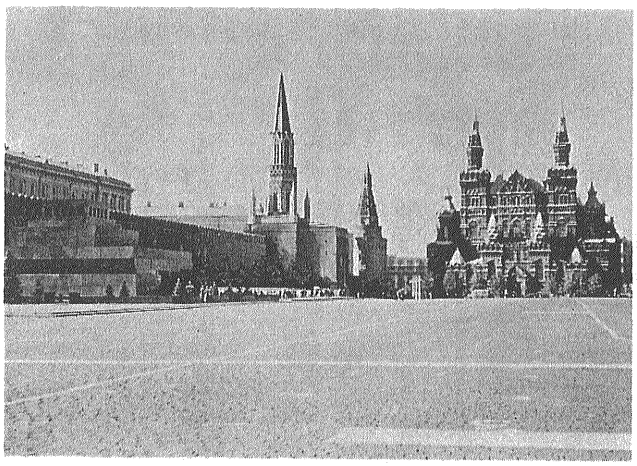
全ソ連地質調査所は　人員約2000名を要し　地質に関する科学的な研究を主とし　探査事業は行なっていない．

したがって定型的な調査は　主として地区地質調査所によって行なわれている．　またソ連における地質図はすべてこの機関によってまとめられ発行されている．内部の機構は所長　次長のもとに21の部に分かれ　地質に関するあらゆる専門的分野の研究が行なわれ　その中には岩石物性　古磁気　地質絶対年代決定などの実験室も含まれている．　ここにはまた博物館　図書館　研修所なども設けられ　さらに所長の諮問機関として　学者会議　地質図作成委員会などがある．　所長　次長などの管理職は地質省から任命されているが　部課長は学者会議の推薦で決められているようである．　所長はなかなかの雄弁家であるが　研究者はたいへん落ち着いたおとなしそうな感じを受ける人が多かった．　ここにも物理探査部があり　物理探査に関する地質的解釈のことを扱っていたが　物理探査部長は女性で　私の訪問をたい

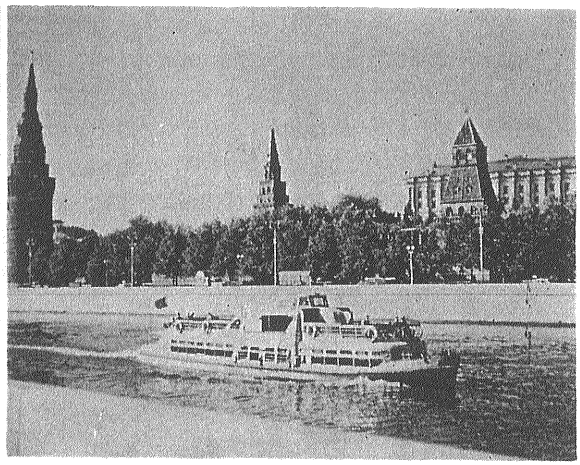


ウクライナホテルの塔

ウクライナホテル前の広場

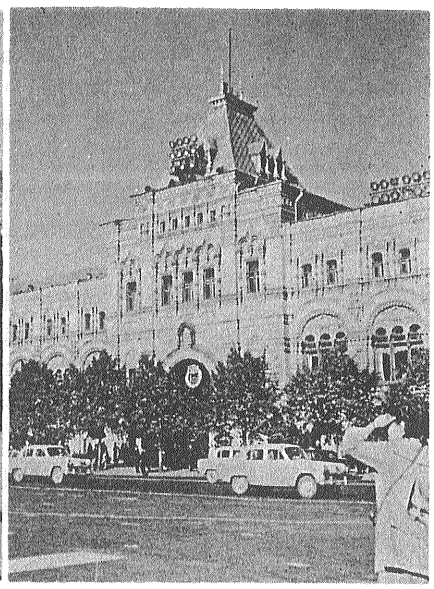


赤　の　広　場



モスコー河からクレムリンをのぞむ

クレムリンの内部（9月中旬でも冬オーバーの人が多い）



モスコーのデパート

へん歓迎してくれた．　また私がレニングラードにきたことを聞いて　先年バンコックで開かれたＥＣＡＦＥの空中探査ゼミナールでいっしょになったソ連代表の人がわざわざ尋ねてこられ　いろいろ文献を贈られたことはたいへんうれしかった．

全ソ連物理探査研究所は　モスコー研究所と調査班に分けられ　人員約3000名　うち1000名は物理探査の研究者である．　研究所は各種物理探査に関する研究室があり　測定器　方法　解析などに関するあらゆる研究が行なわれている．　とくに物理探査結果の解釈の問題　複雑な地質構造に対する調査　深部電気探査　海上物理探査　物理検層などに大いに力を入れているように思われた．　この研究所の調査班は特殊な問題についての調査研究を行なうが　普通の方法による一般的な物理探査は各地区にある物理探査トラストによって行なわれている．

私の今度のソ連旅行については　地質省のフェデンスキー博士が世話をして下さった．　この方は地質　物理探査に関する中心的な方で　ＥＣＡＦＥのソ連首席代表として先年東京にこられた方である．　また物理探査研究所　とくにアレクセーエフ博士および通訳の女性にたいへん世話になった．　アレクセーエフ氏は昭和37年11月電気探査の機械のことで　当地質調査所にこられた方で　電気探査部門の長をしており　フランスにも技術交流で行かれたそうである．　通訳の女性は物理探査研究所の英語の翻訳を担当している人で　私のような英語の下手な者にとってはうってつけの通訳であった．　ソ連の研究所には　外国語の翻訳をするスタッフがそろっており　新しい文献をどしどしロシア語に翻訳し　研究に供している．　当地質調査所発行の「Geology and Mineral Resources of Japan」は向うでもたいへん評判がよく　すでにロシア語に翻訳され　りっぱな本として研究用に用いられている．　日本の文献は相当読まれているらしく　最近の研究をよく知っているのには驚かされた．　ただし日本文の報告には手がでないようでお互いに語学の障壁を痛感した次第である．

このようにソ連においては地質調査事業は重点事業として取り上げられ　中央には大きな研究組織をもち　また各地区には組織的に調査機関が設けられ　これらをモスコーの地質省が統轄している．　すなわち数多くの地質　物理探査などの科学者　技術者を要し　金にいとめをつけないで　新しい研究　数多くの調査に組織的に力を注いでいる．　現在のところ　ソ連の技術は米国　欧州先進国に比べ　必ずしも多くの点で優れているわけではないが　なかには電気探査のように世界において他に例を見ないような発展をしているものもある．　これだけ大きな世帯であるから　なかには無理をしている点も見られないことはない．　研究者としての立場を保つためには専門の本を書かねばならないようである．　りっぱな本も数多く出されているが　あまりにも本が多いので他の国の人にとっては　その選択に迷うことすらある．物深の器械についても　わざわざ作って飾りたてるほどのものではないようなものも見受けられた．　しかしこのようなことができる環境はたいしたもので　私のような雑事に追いまわされている者にとっては　たいへんうらやましく感じた．

国民の経済に密接に関係している地質調査事業を急激に拡大したソ連では　その管理運営をどのようにやっているのであろうか．　また地質関係の科学者　技術者の教育も大いに興味あるところである．　私の短い滞在では　このような点まで知ることができなかったのは　たいへん残念である．

ソ連の石油・ガス鉱業

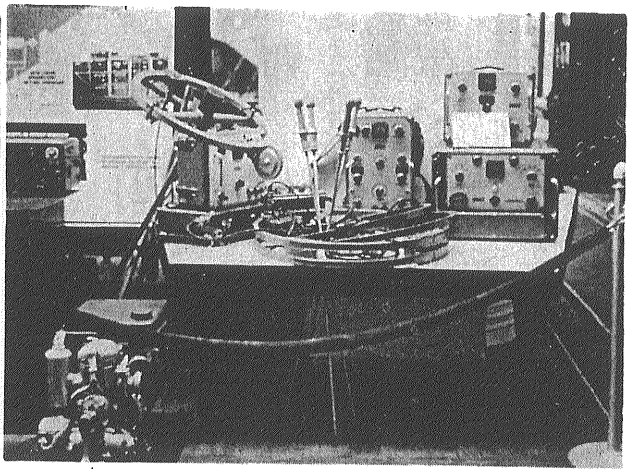
ソ連滞在中　全ソ石油地質研究所を見学する機会を得たが　日数に余ゆうがなかったため　油田地帯の旅行はとりやめた．　しかし研究所で聞いた話　ソ連から出されている報告を見ると　石油・ガス鉱業は　急激に発展しつつあることがうかがわれる．

ソ連の地質学者の研究によると　世界における含石油ガスの堆積層の分布する区域は　2940万km^2 と推定されそのうちソ連は1130万km^2　米国は 430 万km^2 となり　ソ連はアメリカの 2.6 倍の広さを有していることになる．また含油層の地質時代は　カンブリア紀から第三紀までにわたっていることが明らかになってきた．　したがって石油・ガスの産地は　広い国土内の各所に多数発見し得る見とおしができ　また開発は浅層から深層へ　陸域から海域へと発展しているのである．

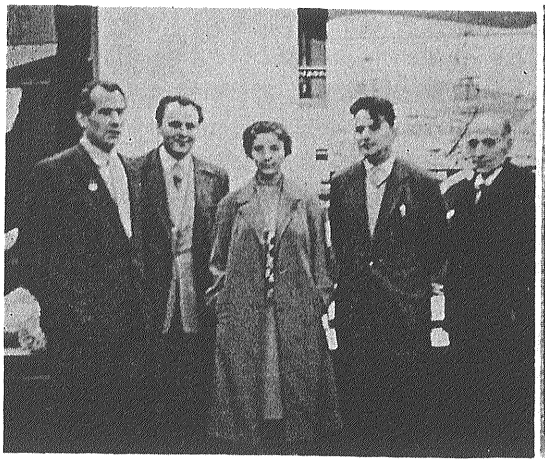
ソ連の石油は約 100 年の歴史を有しており　その産出量は1955年には年間7080万トンであったが　1961年には１億6600万トンと飛躍的に増産されている．　これには最近の油田地質　物理探査　掘さくに関する技術の著しい発達によって探鉱能率がよくなったこと　また採油技術の進んだことがあげられている．　いずれにせよ　ソ連は地質的に石油・ガス鉱業の各条件に恵まれているようであり　将来の計画として1980年には年間約７億トンの石油および多量のガスの産出を策定しているといわれている．　ソ連の石油・ガス鉱業の将来は　大いに注目すべきものであろう．

（筆者は物理探査部長）

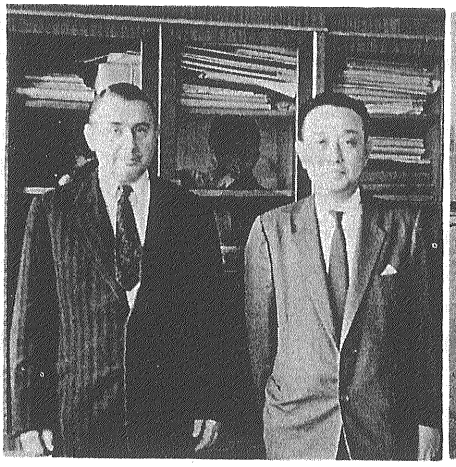
婦人労働者（モスコー郊外で）



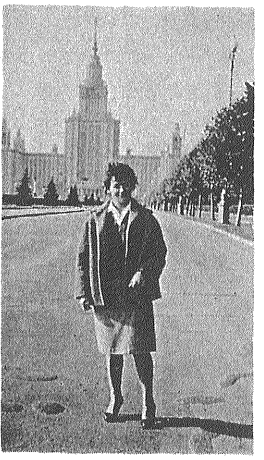
国民経済向上博覧会の展示品　電磁探査装置



全ソ物理探査研究所の職員　左は　アレクセーエフ氏　中央　女性　通訳



フエデンスキー博士（左）と佐藤部長（右）（地質省で）



モスコー大学で　婦人は物探研究所の通訳

モスコー郊外の道路

モスコー大学の一部　はるかに見えるのは新しくできた団地　（モスコー大学本館屋上から）